



紙は大切な記録媒体

北野大

もし自宅が火事になって、何かひとつだけ持って逃げられるとしたら、何を持っていくべきですか？ 大学で学生時代に聞いた話、ほとんどの人が「預金通帳」と答えた。はたしてそうだろうか？

こうしてこんな質問をしたのかといえ、火事で自宅が全焼してしまった友人がこれだけは持って逃げたかったと、アルバムを挙げたからだった。私も同感だ。写真も紙の一種だが、この紙にはその人の人生が記録されている。アルバムには自分の子ども時代の写真はもちろん、家族の変遷も、移り変わる町並みも、そこにはさまざまな思い出が色濃く息づいている。一枚の写真から、忘れていた記憶がよみがえり、その時代へとタイムスリップすることもできる。もちろん、

は過去にばかり生きるものではないが、写真という紙は、思い出を永遠に記録してくれる大切な記録媒体なのである。

紙自体も貴重なものだが、そこに情報や記録や映像などが載ることによって価値が高まる。そして、紙はきちんと保存すればパピルスのように数千年も保つ。まさに、我々人類の文化もこうした紙によって伝承されてきたといえるだろう。たとえば、ドイツに行くとき世の文章が本として残っている。ドイツ語のように大きな変化がなかった言語は中世の文章であっても、時間を超越して文字通り現代人が古代の知識を吸収できるのである。紙にはこんな偉大な力がある。

最近、私は、何でも取っておこうという主義になった。環境化学の中に「スペン・パンキング」という言葉があるが、SPECIEMENというのには、標本、BANKINGは「貯めておく」という意味だ。私たちはここ何十年、環境試料を冷凍保存している。現在、分析できる技術は限られているから、環境や野生にどういった汚染が起きているのかを未来の解析に託すというわけである。日本では環境省が中心になって行っているが、こうした動きは国際的にも高まっている。

日本人は、新しもの好きなのか、古い



北野 大(きたの・まさる) 1942年、東京都に生まれる。東京都立大学大学院工学研究科工業化学専攻博士課程修了。分析化学で博士号を取得。工学博士。専門は環境化学。明治大学理工学部教授。淑徳大学国際コミュニケーション学部客員教授。経済産業省化学物質審査委員会、環境省中央環境審議会委員。最新刊『教育のプロが語る「できる子ども」は環境で決まる』など、著書多数。

ものを大切にしないで、どんどん壊したり、捨ててしまったりしている。あるエコノミストによれば、どんなものでも百年取っておけば、骨格的な価値が上がって金儲けができるのだそうだ。この是非はさておき、日本人はもう一度、古いものを保存していくことを考えていくべきなのではないだろうか。

それから、同じ研究者から見ると、電子媒体の進展に少し危惧を抱くところもある。過日、日本近代文学館に行った際、作家が小説を推敲していく過程が展示されていて、どのようにしてその作品が綴られていったのかがよくわかった。しかし、今はパソコンが主流。どんなに見事な推敲であっても、一字一字印刷して保存しておくわけではないから、訂正するたびに痕跡は影も形もなくなってしまう。電子媒体の登場によって記録を担う紙の役割が変わってきたことは、文学研究者にとって試練の始まりなのではないだろうか。

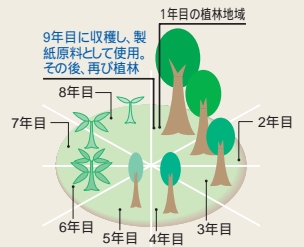
PAPER Q & A Vol.9

Q. 植林は、どのようなサイクルで行われているのですか？

A. 毎年植林し、順次収穫。持続可能な森林経営を行っています。

これからも皆様の紙のニーズに安定して応えていくために、私たちは海外で利用されていない牧草地や荒地、農地跡地などに植林を行っています。右の図は、ユーカリやアカシアなど、8年で成木となる樹種のケースですが、毎年違う所に順々に植えていき、「植林 保育 収穫(伐採)」というサイクルで、一定の収穫量を継続的に得ています。若い木は成長する際に多くの二酸化炭素を吸収するので、つねに若い木がたくさんある製紙産業の植林の森は、二酸化炭素の吸収能力に優れ、地球温暖化防止に貢献しています。また、

海外での植林は雇用機会の創出や道路の整備など、社会環境改善の一助にもなっています。



今回は2月8日号、阪本順治さんです。